

# やまと 民俗への招待

鹿谷 熟

奈良市北部、東大寺軒  
書門西側の東包永町で7月7、8日と赤童子祭りが行われた。町内の家々には、子供たちが描いた祭りのポスターが貼り出されていた。もとは総代の家で7月4、5日に祀られていたが、昭和10年ごろから町の会所で7月14、15日に行われるようになり、さらに7月第2土日となつた。

7日午後1時頃、会所を訪れる自治会長以下役員の人々が忙しく準備を始めていた。座敷に幕を張り、奥には赤童子と三社託宣の軸を掲げ、赤い餅が供えられた。3時から春日大社の神職を迎えて、祭典が執り行わ

れた。夕方からは、子供たちが集まり、「ガラガラ福引き」が始まった。翌日夕方、再び会所をのぞいてみると、あいにくの小雨模様で、時折雷も鳴っているが、雨の中、子供たちは金魚すくいに興じており、みたらしを焼くいい匂いが漂つていて。

赤童子祭りは、明治以降、コレラや天然痘など疫病が流行したときに、祀り始めたと伝えられている。本尊の軸箱を拝見した。蓋に墨書きがあるが、よく見えない。明治2年



赤い餅を供えて執り行われた赤童子祭りの祭典=筆者提供

## 疫病よけの赤童子祭り

だらうか。

春日赤童子の画幅は、

春日曼荼羅の一種とされ、赤色の身体をした童

子が岩座に立ち、頭を支える左手の臂を杖を持つ右手に置き、口をへの字に結んで、見開いた大きな眼で前方をにらみつけている。この特異な像は、赤童子は、春日若宮の垂迹神とされ、興福寺では学僧の護法神として、慈恩寺にも登場する。永島福太郎氏によれば、興福寺衆徒の春日祭のため、春日曼荼羅や三社託宣や法具などを祀るために、春日曼荼羅よりも、赤童子も持ち回りされていたという。この赤童子は土地によっては鹿曼荼羅や富曼荼羅よりも信仰されていたとい

う。赤は血を連想させる色であるが、祝いの色であり、同時に魔よけの色でもあった。子供が疱瘡にかかるると、棧棟（米俵の蓋）に赤い御幣を立て、川原や辻に置いて、疱瘡の神を送った。乳幼児の着物に、赤い糸で「背守り」を縫い付けもしたし、女性の腰巻きも赤い布を用いていた。

赤い色が魔物や疫病を防御するという赤の呪力を信じる民俗が、庶民の赤童子信仰の背景にあつたと思われる。

（奈良民俗文化研究所代表）